

平成 29 年 3 月 7 日

南の風 224

南部ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

カンパージ選手がオフェンスでセットアップポジションに付く前から、『よいポジションに行かさないために、ディフェンスは身体を密着させて心理的にストレスを与える』ことが必要でした。カンパージ選手が走ってフロントコートに入る前から、心理的プレッシャーをかけるべきでした。スローインの時も、べたべた身体に密着して嫌がることをすべきでした。こういうことを徹底していかないと、2m以上の選手がよいポジションを占めてしまっただけでは守ることは不可能です。例え最初のシュートを落としたりとしても、身体の大きさを活かしたりリバウンドでねじ込まれてしまいます。繰り返しますが長身者へのディフェンスは、いつでも身体を密着させて少しでも相手の有利な場所に行かさないことが極めて大事です。

残念だったのはオーストラリアとは、リオ五輪の前に日本で強化試合を行っていたのに、その情報が生かされなかったことです。カンパージ選手の特長は理解していたはずですが、結局オーストラリア戦では彼女に37点取られてしまいました。(4ピリだけで18点)これが大きく響きました。実は日本は、予選リーグの第3戦のトルコとのゲームでも、サンダース選手(203cm)に36点取られています。今後世界と伍していく時には、徹底した長身者対策が求められます。

そのためには長身者のディフェンススキルを吟味して、繰り返して行うことが喫緊の課題です。現在、日本代表の長身者、渡嘉敷、間宮、高田、王、長岡、宮澤の各選手は、国内のリーグや大会では、自分より大きな選手とマッチアップする機会が少なく、悪い言い方をすればあまり苦勞せずに守れてしまっています。(渡嘉敷選手にマッチアップする選手は別ですが。)しかし海外には、女子選手でも2m以上がたくさんいます。そういった選手とのマッチアップの機会を数多く持ち経験を積むことが、世界選手権や2020の東京五輪でメダルを取る近道と言えます。

《取り入れたいビッグマンディフェンスドリル》→藤原の考え

- 1 バックコートからビッグマンに張り付きながら、ボールもルックして行きたいポジションを潰すディナイドリル。(場合によっては、3線から2線になる)
- 2 フロントコートのトップの位置からビッグマンがペイントに入り、リバースターンしてポジション取りをする時のダブルチームの仕方(ビッグマンに近いディフェンスがトラップする)
- 3 ディフェンスリバウンドは、肘を相手に当ててフロントターンで相手より早く跳び込むことを徹底する。ファーストタッチの瞬間ボールの位置を移動する。あるいはタップではじき出す。

また当然のこととして、ボールマンを厳しくチェックして、簡単にパスをビッグマンに入れさせないことも徹底して行かなければなりません。そして2017年オールジャパン女子決勝を観て、JXを負かすチームが出てこない日本全体の女子のレベルが停滞するような気がしました。Wリーグの長身選手が、目の色を変えてディフェンスするようなゲームが増え、簡単にサイズのある選手に得点を許してしまうシーンが減ることを期待します。また日本代表(アカツキファイブ)の合宿や練習期間を十分に確保し、海外のチームとのゲームが、ふんだんにできる環境をぜひつくってほしいと感じました。